

各関係機関の長  
各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除・肥料検査センター所長

平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 0 号について  
平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 0 号を発表したので送付します。

## 平成 2 0 年度病害虫発生予報第 1 0 号

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

### 発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量の 平年比	記載ページ
施設野菜全般	病害一般	-	2
	タバココナジラミ類	並～やや多	2
冬春キュウリ	べと病	並	2
	うどんこ病	並	3
	灰色かび病	並	3
	褐斑病	並	3
	ミナミキイロアザミウマ	並	3
	タバココナジラミ類	並	3
	黄化えそ病 (MYSV)	-	3
冬春ピーマン	斑点病	やや多	4
	うどんこ病	並	4
	ミナミキイロアザミウマ	並	4
	黒枯病	前年と同程度	4
冬春トマト	葉かび病	並	4
	灰色かび病	やや多	5
	タバココナジラミ類	やや多	5
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	-	5
冬春イチゴ	うどんこ病	並	6
	アブラムシ類	並	6
	ハダニ類	やや多	6

### 作物の生育状況 (1月中旬)

冬春キュウリ、冬春ピーマン、冬春トマト、冬春イチゴは収穫期であった。

### 向こう 1 か月の気象予報

冬型の気圧配置は長続きせず、天気は数日の周期で変わり、平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並または高い確率ともに 40%、降水量は平年並または多い確率ともに 40%、日照時間は平年並または少ない確率ともに 40% と予想されている。

( 1 か月予報 鹿児島地方気象台 1/23 発表 )

## 発生予報の根拠および防除対策

### 施設野菜全般

#### 1 病害一般

平成20年度病害虫防除情報第6号（1月26日発表）参照

長期予報によると、平年に比べて曇りや雨の日が多く、気温は平年並または高い、降水量は平年並または多い、日照時間は平年並または少ないと予想されていることから、各種病害の発生が懸念されるため、気候の変化には細心の注意を払い、施設内の温湿度管理を徹底する。

また、コスト低減のため、夜温を低めに管理したりハウスサイドや内ホ口を多層被覆するなど様々な対策が取り組まれているところでは、施設内が多湿になりやすく、病害の発生が助長される傾向があるので特に注意する。

キュウリ：べと病、灰色かび病、菌核病、斑点細菌病、褐斑病など

トマト：疫病、灰色かび病、菌核病、葉かび病、すすかび病など

ピーマン：灰色かび病、菌核病、斑点病、黒枯病、軟腐病など

#### 2 タバココナジラミ類（*タバココナジラミ* *ハ・イタイブ・Q*、*シルバーリーフコナジラミ*）（並～やや多）

[予報の根拠]

- (1) 冬春キュウリでの発生面積率28.6%（平年25.8%）、100葉当たり虫数2.6頭（平年2.7頭）はいずれも平年並である。
- (2) 冬春ピーマンでの発生面積率7.1%（前年20.0%、前々年7.7%）は前々年と同程度、100葉当たり虫数0.9頭（前年1.1頭、前々年0.1頭）は前年と同程度である。
- (3) 冬春トマトでの発生面積率46.2%（平年23.0%）、100葉当たり虫数5.4頭（平年2.2頭）はいずれも平年よりやや多である。

[防除上の注意]

- (1) タバココナジラミ *ハ・イタイブ・Q* と *シルバーリーフコナジラミ* の形態上の差異は成虫、幼虫ともに確認されておらず、両種の肉眼での区別は困難である。
- (2) 多発するとスス病を併発して商品価値を著しく損ねるので初期防除を徹底する。
- (3) 低密度でも、トマトではトマト黄化葉巻病（TYLCV）を媒介したり、ウリ科作物（メロンやキュウリ）では退緑黄化病（CCYV）（仮称）を媒介することが明らかになっているので、特に注意が必要である。
- (4) 防除対策については、トマトのタバココナジラミ類（5ページの3）を参照のこと。

### 冬春キュウリ

#### 1 べと病（並）

[予報の根拠]

- (1) 1月中旬の発生面積率52.3%（平年71.8%）は平年より少、発病葉率11.3%（平年15.7%）は平年よりやや少である。
- (2) 向こう1か月の天候は、平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並または高い、降水量は平年並または多いと予想されており、本病の発生・蔓延に好適な条件が続くと考えられる。

[防除上の注意]

- (1) 湿度が高いときに発生しやすく、激発すると防除が困難となるので、予防散布に重点をおき発生が見られたら初期防除を徹底する。
- (2) 窒素切れや草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないように肥培管理に注意する。

## 2 うどんこ病 (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬の発生面積率47.7% ( 平年45.2% )、発病葉率4.6% ( 平年4.5% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 病勢が進展してからでは防除効果が低くなるので、発病を確認したら早めに防除する。

( 2 ) 耐性菌を生じやすいので、同一系統薬剤の連続散布を避ける。

( 3 ) 乾燥時に多発するので、ほ場が過乾燥にならないように管理に注意する。

## 3 灰色かび病 (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬の発生面積率0.0% ( 平年8.5% )、発病果率0.0% ( 平年0.3% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等、結露防止に努める。

( 2 ) 花卉等の発病に注意し、予防を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

## 4 褐斑病 (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬の発生面積率47.6% ( 平年42.0% )、発病葉率3.5% ( 平年5.3% ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 多発してからの防除は困難なので、初期防除を徹底する。

( 2 ) ベと病の後に激発することがあるので、ベと病の発生が多い圃場では特に注意して予防を徹底する。

( 3 ) 窒素質肥料の多用は、発病を助長し過繁茂になって通風を妨げるので、適正な肥培管理に努める。

( 4 ) 摘除した発病葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

## 5 ミナミキイロアザミウマ (並)

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬の発生面積率9.5% ( 平年7.9% ) は平年並、葉当たり虫数0.4頭 ( 平年0.2頭 ) は平年よりやや多である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除する。

( 2 ) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で2~3回の連続した防除を行う。

## 6 タバココナジラミ類 (並)

( 1 ) 1月中旬の発生面積率28.6% ( 平年25.8% )、100葉当たり虫数2.6頭 ( 平年2.7頭 ) はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 防除対策については、トマトのタバココナジラミ類 ( 5 ページ ) を参照のこと。

## 7 黄化えそ病 (MYSV)

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 10月下旬以降一部の地域で数例の発生が確認されたことから、今後、厳重な警戒が必要である。

( 2 ) 県内に定着するおそれがあるので、発生したほ場においては特に、媒介虫であるミナミキイロアザミウマがほ場外に拡散しないように、防除を徹底する。

## 冬春ピーマン

### 1 斑点病（やや多）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率57.1%（ 平年29.0% ）、発病葉率4.2%（ 平年1.9% ）はいずれも平年よりやや多である。
- ( 2 ) 向こう1か月の気象は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並又は高い、降水量は平年並または多いと予想されている。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) ハウス内が高温多湿にならないように、換気と水管理に注意する。また、整枝を行って茎葉が過繁茂にならないようにする。
- ( 2 ) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、予防散布を行う。

### 2 うどんこ病（並）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率35.7%（ 平年57.4% ）は平年よりやや少、発病葉率2.9%（ 平年6.2% ）は平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 乾燥した条件で発生しやすいので、乾燥させすぎないように適正な水管理に努める。
- ( 2 ) 病勢が進展してからでは防除効果が低いので、早期発見に努め発病を確認したら早めに防除する。

### 3 ミナミキイロアザミウマ（並）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率42.9%（ 平年38.7% ）、10花当たり寄生虫数1.0頭（ 平年1.3頭 ）はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 10花当り寄生虫数が1頭から被害果が出始め、また多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底する。
- ( 2 ) 施設内では、卵・幼虫・蛹・成虫が混在し、卵と蛹には薬剤がかかりにくいので、7日間隔で2～3回の連続した防除を行う。

### 4 黒枯病（前年と同程度）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率21.4%（ 前年26.7%、前々年7.7% ）、発病葉率0.9%（ 前年1.5%、前々年0.1% ）はいずれも前年と同程度である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) ほ場内が多湿条件にならないよう換気に努め、排水を良好にするとともにマルチなどを行う。
- ( 2 ) 被害茎葉、果実は伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処理する。

## 冬春トマト

### 1 葉かび病（並）

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率7.7%（ 平年11.4% ）、発病葉率0.8%（ 平年1.0% ）はいずれも平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 多湿条件で発生しやすいので、ハウスの換気を良くする。

( 2 ) 発病初期の防除を徹底する。

## 2 灰色かび病 ( やや多 )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬の茎葉での発生面積率30.8% ( 平年7.5% )、発病株率0.6% ( 平年0.6% ) はいずれも平年よりやや多である。

( 2 ) 果実での発生面積率7.7% ( 平年1.5% )、発病果率0.3% ( 平年0.1% ) はいずれも平年より多である。

( 3 ) 向こう1か月の天候は平年に比べて曇りや雨の日が多い、気温は平年並または高い、降水量は平年並または多いと予想されており、本病の発生・蔓延に好適な条件が続くと考えられる。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 多湿条件で発生しやすいので、日中の換気、夜間の加温等で湿度低下を図り、曇雨天日には加温機の送風を作動させる等結露防止に努める。

( 2 ) 花卉等の発病に注意し、予防を徹底する。なお、薬剤耐性菌が出現しやすいので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

## 3 タバココナジラミ類 ( シハ' -リ'コナジ'ラミ、タバ' コナジ'ラミ バ'イ'タイ'Q ) ( やや多 )

( 1 ) 1月中旬の発生面積率46.2% ( 平年23.0% )、100葉当たり虫数5.4頭 ( 平年2.2頭 ) はいずれも平年よりやや多である。

( 2 ) 向こう1か月の気温は平年並または高いと予想されており、本虫の増殖に好適であると考えられる。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 黄色粘着トラップ等を設置し、タバココナジラミ類の早期発見に努めるとともに、栽培期間中を通して防除を徹底し、本虫の密度を抑制する。

( 2 ) タバココナジラミバイオタイプQに効果のある殺虫剤が少ないことから、発見したら早めに防除し、薬剤散布後は防除効果に注意を払い、必要に応じて適宜追加防除を行う。

( 3 ) 施設内外の雑草はコナジラミ類の寄主となるので除草を徹底する。また、施設内では栽培目的以外の不要な作物や観葉植物等は栽培しない。

( 4 ) 有効な薬剤に対する抵抗性の発現を回避する観点から、同一及び同一系統の薬剤の連用は極力避け、ローテーション散布を心がける。また、抵抗性発現の可能性が低いポタニガードES等の微生物農薬や、粘着くん液剤等のコナジラミを物理的に窒息死させる薬剤を防除体系に組み込む。

## 4 トマト黄化葉巻病 ( TYLCV )

[ 予報の根拠 ]

( 1 ) 1月中旬の発生面積率は7.7% ( 前年0.0%、前々年16.7% )、発病株率は0.05% ( 前年0.00%、前々年0.13% ) である。

( 2 ) 媒介虫であるタバココナジラミ類は平年よりやや多の発生 ( 前述 ) である。

( 3 ) 向こう1か月の気温は平年並または高いと予想されており、タバココナジラミ類の発生・拡大が懸念される。

[ 防除上の注意 ]

( 1 ) 発病株は伝染源になるので、根ごと抜き取り、土中に埋めるかビニル袋に入れて枯れるまで密閉する。ウイルスは植物全体に存在し、発病部位を除去しても伝染源になるため、必ず株全体を除去する。

( 2 ) タバココナジラミ類の防除対策は、前項3を参照のこと。

## 冬春イチゴ

### 1 うどんこ病 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の葉での発生面積率46.2% ( 平年28.0% ) は平年よりやや多、発病葉率1.2% ( 平年1.9% ) は平年並である。
- ( 2 ) 果実では、発生未確認である。平年値 ( 発生面積率7.8%、発病果率0.2% )

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 初め葉裏に発生しやすいので早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- ( 2 ) 激しく発病すると防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発病後は散布間隔を短くするなど発病初期の防除を徹底する。
- ( 3 ) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除きほ場内に放置しない。

### 2 アブラムシ類 (並)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率7.7% ( 平年23.9% ) は平年よりやや少、寄生株率2.2% ( 平年2.8% ) は平年並である。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 多発すると新葉の展開が不十分になり、奇形葉やスス病を併発して、樹勢や果実品質を著しく損ねるので注意が必要である。
- ( 2 ) この時期の防除は、ミツバチへの影響が懸念されるので十分に留意する。

### 3 ハダニ類 (やや多)

[ 予報の根拠 ]

- ( 1 ) 1月中旬の発生面積率69.2% ( 平年45.4% )、寄生株率14.3% ( 平年12.2% ) はいずれも平年よりやや多である。
- ( 2 ) 向こう1か月の気温は平年並または高いと予想されており、本虫の増殖に好適な環境がつづくと考えられる。

[ 防除上の注意 ]

- ( 1 ) 寄生数が増加してからの防除は困難なので、低密度時から防除を徹底する。
- ( 2 ) 株整理後、葉数が少なくなった時期に薬剤散布を行うと防除効果が高くなる。茎葉繁茂時には散布圧を強めて、葉裏に良くかかるように散布する。
- ( 3 ) 薬剤感受性の低下を避けるため、同一及び同一系統の薬剤の連用を避ける。

## その他

- 1 農薬適用の有無などについては次のホームページで確認してください。  
日本植物防疫協会ホームページ <http://jppn.ne.jp>  
農林水産省ホームページ <http://www.maff.go.jp/nouyaku/>
- 2 農薬の使用に当たっては、農薬使用基準の遵守並びに危被害の発生防止に努めましょう。特に水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名、マリックス乳剤、粒剤等）は使用しないこと。
- 3 発生量（程度）の区分

多	い	（高	い）	やや多いの外側10%の度数の入る幅
やや多い		（やや高い）		平年並の外側20%の度数の入る幅
平年並				平年値を中心として40%の度数の入る幅
やや少ない		（やや低い）		平年並の外側20%の度数の入る幅
少ない		（低	い）	やや少ないの外側10%の度数の入る幅 （平年値は過去10年間の平均）
- 4 予察情報の種類  
病害虫防除・肥料検査センターから発表する情報は次の5つです。
  - (1) 予報・・・向こう1か月の発生状況を予測し、毎月25日前後に発表する。
  - (2) 注意報・・・主要な病害虫の多発生が予想され、かつ早めに防除が必要な場合に発表する。
  - (3) 警報・・・主要な病害虫の大発生が予想され、かつ緊急に防除が必要な場合に発表する。
  - (4) 特殊報・・・県内で初めて発生を認めた病害虫がある時や、病害虫の発生様相が特異な時に発表する。
  - (5) 防除情報・・・注意をうながす必要がある病害虫の発生状況や、各種の防除技術指導情報について随時発表する。

**お知らせ** (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除・肥料検査センターでは、ホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を掲載しています。ぜひご利用ください。

### 【文書取扱】

病害虫防除・肥料検査センター 生頼  
TEL:0985-73-6670 FAX:0985-73-7499  
E-mail: byogaichu-hiryo@pref.miyazaki.lg.jp